

オールド・ヴィック座で『十二夜』を観る

A Translation of Virginia Woolf's "Twelfth Night' at the Old Vic" (1933)

from *The Death of the Moth and Other Essays* (1942)

坂本正雄 訳

translated by Masao SAKAMOTO

(和歌山大学教育学部英語教室)

2013年10月4日受理

よく知られたことだが、シェイクスピア好きは三つの系統に分けられる。作品を読むことが好きなもの、舞台を観るのが好きなもの、作品を読むことから上演に至るまでずっと駆け回って掘り出し物をかき集めるもの。まあ、たとえばリングが落ちる音、あるいは杖が風にばさばさ鳴る音以外は何も聞こえない庭とかで『十二夜』を読むのであれば、言いたくなることもたくさん出てくる。つまりは時間がたっぷりある。「スマレ咲く丘に吹く風心地よき音」を耳にする時間ばかりでなく、恋の理を説くオーシーノ公爵のそのえもいわれぬことばの意味を解きほぐす時間。また、余白にメモをする時間。「姫の心に住む(live)すべての気持ち、その熱情(liver)、思考、そして愛情が…」とか「あの晩(night)連れてこられた、お馬鹿な騎士(knight)のこと」といった奇妙な押韻を、はてこれは何のことだろうと思うその時間、あるいは可愛らしい台詞、「イリリアまでやって来て、私、どうしようというのかしら。お兄様はあの世に召されたというのに」が生まれ出るのはそうしたしゃれからなのか、と自問してみる。こうした時間もあるのだ。つまりはシェイクスピアは自分の知力を総動員してあるいは統御してというのではなく、ふと思いついたことばの痕跡を捕らえたり後先考えず追いかけてたりして、触手を伸ばして、ことばに戯れて書いているようだ。ひとつのことばを思い浮かべれば、その響きを残してつぎのことばが生まれ出る。そのためだろう、読み進めるとともに、音楽が絶えず向こうで鳴り響くのを聞きながら、劇が震えているように思える。『十二夜』ではいつも音楽が奏でられる。「おお、よく来た。夕べの歌を聴かせてくれ。」でもシェイクスピアはことばに狂っていたわけではない。それよりことばをひっくり返して、笑いものにすることができたというわけだ。「ことばをもてあそぶものは、すぐにことばに翻弄される。」笑いがわき起こる。トービー卿も、アンドルー卿も、マライアも吹き出し

てしまう。役者の口にくっつくことばは意味あるもの。ほんの短い文句の中に人となりや全部詰め込み、押し合いへし合い飛び出してくる。アンドルー卿が言う。「ぼくに惚れる女もいたさ。」そのとき観客は両手の中にアンドルー卿を包み込んだと思う。小説家ならそうした理解の度合いにまで読者を連れて行くのに三冊は書かなきゃいけないところだ。そうしてヴァイオラ、マルヴォリオ、オリヴィア、そして公爵。役者たちが、わたしたちが思い描く舞台に出てきて、光と陰の中に出たり入ったりしているうちに、その役柄についての知識、思いつきでこころは溢れんばかりにいっぱいになり、どうしてその役柄を男女の、役者の身体の中になぜ閉じ込めてしまうのだろうと思ってしまふのだ。『十二夜』の庭を劇場になぜ取り替えてしまうのだろう。答えはこうだ。シェイクスピアは舞台用に劇を書いた。それももっともな理由できつとそうしたのだ。役者たちはオールド・ヴィック座で『十二夜』を演じている。それならば今述べたふたつの版を比べてみようではないか。

ウォータールー通り(訳注: Old Vic座が所在した通りの名。Old Vic座は1963年からNational Theatreとなった)に来ると、たくさんのリングが落ちて音も聞こえないくらいに賑やかだ。陰は電気の明かりで見えない。オールド・ヴィック座に入ると、圧倒的な質感と明るさで迫ってくる。庭の陰からパルテノン神殿の橋を目の前にしたみたいだ。この比喩は混用というもの。でも舞台立ててもそうだ。橋の支柱からは大西洋定期便も古代ギリシャの神殿の身の引き締まる壮麗さも組になって示される。しかし人物はもう舞台立て同様意味が分からない。マルヴォリオ、トービー卿、オリヴィア、それからその他の役者たち。見ていると、わたしたちのこころのなかに、想像で膨らみ、現実の役者とは似ても似つかなくなる。はじめ、いやな気になる。あなた、マルヴォリオでもなければ、トービー卿でもないでし

よ。役者たちにそう言いたくなる。ただの山師よね。こんなものがお芝居かしら、そう思って口をあんぐり開けたまま座席に座っている。芝居の偽物。それから次第に、この同じ身体、いや身体のすべてが一緒になって、こころの中で繰り広げられるお芝居を乗っ取り、改造するのだ。お芝居はなんだかたくましきとか、実質性とかをすごい程度で増してゆくのだ。台本に印刷された文字が今まで聞いたこともないような、別人の耳で響いているようなものに変化する。ことばが観客のひとりひとりの、男も女も、こころを打つを見る。観客が笑い、肩をすくめ、顔を背けて、顔を隠す。ことばにはこころも身体も宿る。するとまた役者たちは立ち止まり、身動きできなくなって、ひっくり返る。あるいは腕をひろげる。台本、ことばの単調さが、裂け目や断崖が現れたように、破られる。バランスがすべて変化したのだ。劇中、もっとも印象的な箇所は、セバスチャンとヴァイオラがお互いを認め合って、口をきかずにうっとり見つめ合い、じっと立ち止まっている時だ。その瞬間、本を読んでいる読者であれば、その瞬間全体を見落とすのも無理からぬ箇所だ。そうしてわたしたちはここで立ち止まり、考え込むのだ。なるほどシェイクスピアは身体とこころと、このふたつを目覚めさせるのに、劇を書いたのだと。

しかし役者たちはここまでで観客の印象を固め、増強する仕事をきちんと済ませているので、役者をもっと子細に批評したり、舞台版と読書中に作り上げた印象版とを比較しはじめるわけだ。俳優クォーターメイン氏が演じるマルヴォリオを「印象マルヴォリオ」の横に立たせてみる。実のところ、あらが見えたとしる共通のものはほとんどない。クォーターメイン氏のマルヴォリオは申し分ない紳士。礼儀正しく、思いやりがあり、育ちも良い。資質を持ち、ユーモアを解する。世間とは喧嘩をしない。見栄を張ってみたいと一度でも思ったり、一瞬でも人のことをねたんだりしたことはない。トービー卿とマライアがだましたりすればちゃんと見通し、ちいさな子どもの戯れとして紳士然とじっと耐えるのだ。一方、読書してこころに描いたマルヴォリオは風変わりで、複雑な人物だ。虚栄心で身体がひきつく。野心に苦しむ。他人をからかうときには残酷でさえある。敗北の時には悲劇のにおい。最後に脅す時には、一時の恐怖も。しかしクォーターメイン氏が「お前たち皆に復讐してやる。」と言う時、法の力がすぐにしかも効果的に発効するだろうと思ってしまうのだ。つぎの「マルヴォリオはほんとにひどい目に遭ったのね。」というオリヴィアの台詞はどういう意味なのか。そしてオリヴィアがいる。女優マダム・ロポコバには得ようと思っても持ち得ない意志の力で押さえつけようとしても抑えられない、たぐいまれな資質がもともと備わっている。人間を表現する天才だ。舞台の上へと進んでくれば良い、周りのすべてが変化

する。完全に変わるのではない。光とか陽気とかに変化するのだ。鳥が歌う。羊が花輪をかぶる。風が調べにのって音を響かせる。人々は友愛、共感、喜びで胸を満たし、つま先だって、ダンスをしながら近寄っていく。でも本の中に出てくるオリヴィアは体格の良い伯爵夫人だ。浅黒い顔色。ゆったりとした動き。人に共感することはほとんどない。公爵を愛することもなければ、自分の気持ちを変えることもない。マダム・ロポコバのオリヴィアはあらゆる人を愛する。いつも自分の気持ちを変化させていく。手、顔、脚、身体のすべてがその瞬間瞬間に気持を合わせて、震えるのだ。セバスチャンと階段を降りる時に示したように、一瞬を激しいそして感動的な美へと変えることができる。でもそれはわたしたちのオリヴィアではない。オリヴィアと比べれば、喜劇グループつまりトービー卿、アンドルー卿、マライア、道化たちは普通とはいえないイギリス人だ。野卑、ひょうきん、強壯、歌うように台詞を奏でる。みんなは自分の思うように、動き回る。演技も素晴らしい。ミス・セイラの演じるマライア以上のマライアを読書の最中に作り上げることはできない。利発で、創意工夫を懲らし、陽気だ。リヴジー氏演じるトービー卿が口にするユーモアには付け加えるところがない。ヴァイオラ役のミス・ジーンズも申し分ない。アントニオ役のヘア氏、じつに見事だ。モerland氏の道化も見事な道化だ。では劇全体欠けているところはどこだろう。ことによると全体としてということではない。責任は一部シェイクスピアにある。シェイクスピアの喜劇は詩よりは演じやすい。まあ、そう思える。だって詩人のシェイクスピアは人間の舌が発音できる以上のスピードで書いたからだ。潤沢な比喩が、眼でピカッと伝えられる。しかし口に出すことばは途中でつまづく。だからこの喜劇はあとの部分もバランスを失っている。そしてたぶん役者たちは個性を詰め込まれすぎている、あるいはミスキャストだったのだ。劇自体をこなごなに壊してしまっている。観客はアルカディアの森にいるかと思うと、ブラックフライアーズの旅籠にいる。作品を読んだ後に舞台を見ているのであれば、こころが場面場面をつなぐ糸を紡いでくれる。リンゴが落ちて、教会の葬送鐘が鳴っても、フクロウが異様な音を立て飛んでも、背景を混ぜ合わせ、劇をひとつにまとめていく。劇場を出る時、こころには多くのきらびやかなシーンが残っている。しかしなにかと気持を通じ合わせた、なにかと結びあったという感覚はない。もっともこうした感覚は、演技がもっときらびやかではない劇を見て得られる満足感かもしれない。それでも劇自体はその目的を果たしたのだ。読んでこころの中にかたちづくったマルヴォリオとクォーターメイン氏のマルヴォリオをわたしたちは比較している。オリヴィアもわれわれのものとマダム・ロポコバのものと。劇全体の読みとガス

リー氏(Tyrone Guthrie, 1900-1971)の演出と比べることができる。それらはことごとく異なるので、読者はもう一度シェイクスピアの脚本に戻らなくてはならない。『十二夜』をもう一度読まなくてはならない。ガスリー氏はそう要求しているのだ。そうして上演予定となっている『桜の園』、『尺には尺を』、『ヘンリー八世』への期待感を高めるのだ。